

## カルメン・マルティン・ガイテ 『窓辺から スペイン文学における女性の視点』

磯 山 久美子

Desde la ventana : Enfoque femenino de la literatura española

KUMIKO ISOYAMA

キーワード

スペイン (Spain)、女性作家 (Spanish novelist)、フェミニズム (Feminism)、批評 (Criticism)

はじめに カルメン・マルティン・ガイテという作家について

翻訳にあたり、作者カルメン・マルティン・ガイテ（一九二五—二〇〇〇）について少し紹介しておきたい。マルティン・ガイテは、二〇世紀を代表するスペインの女性作家の一人である。スペイン中央部サラマンカ市の出身で、サラマンカ大学ロマンス言語学文学部卒業後、マドリード大学博士課程に進んだ。短編『湯治場』（一九五五）で作家としての道を歩み始める。『カーテンのすき間』（一九五八）で、ナダル賞を受賞、以後小説家としての地位を築い

ていく。マルティン・ガイテ自身の姿が投影されているとされる女性作家が登場する『後ろの部屋』（一九七八）で、女性作家として初めてスペイン文学賞を受賞し、さらに一九九四年にも同賞を受賞した。以後『晴れたり曇ったり』（一九九二）、『雪の女王』（一九九四）、『奇妙なことは生きること』（一九九七）、『家を出る』（一九九八）など多くの長短編作品を発表する。さらにエッセイはもちろんのこと、映画やテレビの脚本も手がけ、翻訳も数多くあるなど、多様な活躍をみせた。

しかしマルティン・ガイテの活動が特筆すべきなのは小説家としての活動だけでなく、歴史・社会研究へも関心が高かったことである。一八世紀の政治家であり作家であったメルチョール・マカナスが、教会改革を目指すもあえなく挫折する軌跡を描いた『マカナス、異端審問のもうひとりの犠牲者』（一九六九）を初めとして、『一八世紀スペインにおける恋愛様式』（一九七二）では、恋愛に対

する一八世紀の人々の意識や様式を言語や風俗といった視点から研究し、女性たちが意志をもって恋愛を選び取っていったことを明らかにした。この関心は『内戦後のスペインにおける恋愛様式』（一九八七）へと続く。

こうした一連の活動のなかで、マルティン・ガイテがフェミニズム批評というジャンルに関心を抱いていくのは、ある種自然な流れだったともいえる。フェミニズムの視点から文学を批評しているという試みは、米国の作家で芸術家でもあったケイト・ミレットの『性の政治学』（一九七〇）に始まるともいえるだろう。ミレットはフェミニズムの視点から文学テクストが普遍性、中立性を打ち破るものであることを明らかにした。その後女性作家のテクストの読み直しが行われていくが、本書でもたびたび登場するエレイン・ショウウォーターは、女性の自己認識がイギリス小説のなかでどのように語られてきたかを『女性自身の文学』（一九七七）を通して検証し、女性は自身の文学を育ててきたことを明らかにした。本書『窓辺から スペイン文学における女性の視点』は、ミレットやショウウォーターと同時代に生きて運動の波を感じ取っていたマルティン・ガイテが、スペインの女性作家による文学作品のなかに、そのような可能性があるのかを探ろうとした初めての試みである。一六世紀のテレサ・デ・ヘススから二〇世紀のカルメン・ラオフレまで、各時代の女性作家の「物語を紡ぐ」ことはその背景に何を抱えていたのか、その記述は果たして女性独特のものだったのかを詳細な読みから迫っている。なお、訳出に際しては、一九八七年の

初版<sup>③</sup>を参照し、文庫化された一九九三年版の第三版<sup>④</sup>を基にした。

## 「序章 はじめに」

女性がものを書くときに独特の叙述法をもっているのかという問いは、彼女たちの文学作品についても、特別な批評的扱いをする要因となるのかもしれないが、私は何も書かずに紙に向かっているときも、女性の名前が記された小説や詩を夢中で読みふけるとときも、全く気にしたことはなかった。

この件について私の好奇心を呼び覚まし、考えさせることになった最初のテクストのことをとてもよく覚えている。それはヴァージニア・ウルフの「自分ひとりの部屋（*A room of one's own*）」というエッセイで、一九八〇年秋にニューヨークに滞在していたときに読んだ。

いくつかの限られた本と読者との情熱的な関係、読者のなかに特

(3) Mairín Gaité, *Carmen. Desde la ventana. Enfoque femenino de la literatura española*. Madrid: Espasa Calpe, 1987.

(4) Mairín Gaité, *Carmen. Desde la ventana. Enfoque femenino de la literatura española*. Madrid: Espasa Calpe. Colección Austral, 1993.

(1) 女性解放運動の初期に最も影響を与えた理論家の一人で、全米女性解放運動の初期に最も影響のあった理論家の一人。一九六〇年代に公民権運動に関わったなかから、仲間と全米女性機構(NOW)を設立する。リサ・タトル『フェミニズム 辞典』、明石書店、一九九一年、一四二頁。

(2) エレイン・ショウウォーター『女性自身の文学』、川本静子ほか訳、みすず書房、三八一頁。

(5) ヴァージニア・ウルフ (*Virginia Woolf*, 1882-1941)。ロンドン生まれ、モダニズムの作家、批評家として知られる。『自分ひとりの部屋』は一九二九年に発表されたエッセイである。*A Room of One's Own*, The Hogarth Press, 1929. これまでに数版が出版されており、本稿では、一九四五年、一九九三年の Penguin books 版を参照した。エッセイの底流をなすのは女性と小説というテーマの文学論だが、「女性が小説を書くか」と思うなら、お金と自分ひとりの部屋を持たなければならぬ」という言説が後世に知られているように、女性論、フェミニズム論でもあり、またフェミニズム批評の古典ともいえるだろう。それゆえ邦訳もいくつか存在し、それぞれタイトルも異なっている。村松加代子訳『私ひとりの部屋』、松香堂書店、一九八四年、川本静子訳『自分だけの部屋』、みすず書房、一九八八年、片山亜紀訳『自分ひとりの部屋』、平凡社ライブラリー、二〇一五年。本書を訳するに当たり、各書を参照しつつ、『自分ひとりの部屋』とした。

別な足跡を残し、彼らを思いがけない方向に放って思考や想像力を揺り動かす本があることはよく知られている。そしてその関係は、本と出会う際の周囲の個人的な環境に左右される。実際、私たちは多くの読者を知っているが、彼らは印象深かった本を薦める前に、どうやって偶然その本に出会ったのか、読むことで引き起こされてきた意見と密接につながっている話を楽しそうに語るのだ。一般的に、こうした語り手たちが浮き彫りにするのは、ある愛の冒険物語を要約するときのように、刺激を受けたことである。彼らに何か違ったことがおきたことがわかる。つまり新しい友人の声と同時に、人生すべてにわたる声を見つけたのだ。しかし何よりも彼らに直接語りかけて無気力をゆさぶり、見通しのない、アクセントもない、実りのない孤独な時間をやわらげるために、どこからか言葉が降り注がれる。奇跡的に偶然手に渡ったそのテキストを前に読者が感じたまぶしさ、それは受け取るのに最もふさわしい瞬間なのだが、次のようなことからきている。その本は自分が受取手であり、特別自分に向けて言われるかもしれないメッセージの共犯だと感じさせるからだ。つまりその日身につけた手袋のようにびったりしているということなのだ。

女性についての議論と、ヴァージニア・ウルフが『自分ひとりの部屋』と名付けたエッセイを私が同一視すること、あのニューヨークの秋が私にこの本を読ませようと、(一九二九年から)五十年間待ち続けたのだということについては、おそらく、読んだときの状況を説明することが必要になってくる。私はバーバード・カレッジで講義をするためにアメリカに行き、一一九番通りのとても気持ちのいいアパートで初めて全く一人で暮らすことになった。私の自由な時間を誰にもわずらわされることなく、しかもそれはふんだんにあり、私に関わる人たちの要求や問題といったものに邪魔されることもなかった。とはいえ、彼らのことを懐かしく思った。というのは独立するということはいいつも女性にとって諸刃の刃だからだ。初めはどこか気の

すすまない仕事に数日間を費やした。例えば住み始めたばかりで、思い出の品もないあの部屋でひっそりと孤独に耐えていたのだが、私にとっては頑固さと細心の注意でそれを克服する作業だった。授業の準備をしたり、音楽を聴いたり本を読んだりしながら長い時間部屋にいた。そして日記のつもりで、一冊のノートを装飾することも楽しみとして始めた。それは次第に短くなっていくテキストに下線を引いた一連のコラージュになった。というのもニューヨークではイメージは言葉よりも速く流れるからで、言葉にとつて代わった。まさに手元に残っているなかでよくできたノートのひとつが、『自分ひとりの部屋』を読んだことが元になって作られた「ヴァージニア・ウルフへのオマージュ」というタイトルのものだ。

ウルフの本は五番街の書店で購入した。私に示唆を与えてくれそうだと思ったのは本のタイトルだけでなく表紙のインパクトだった。緑のライニングチェアが見え、その前に黒い影を伴って、緑と黄色の巨大な万年筆が立てられていた。本は一九二八年に作家が行ったいくつかの講演をまとめたもので、最初のフリーズは、タイトルを正当化しようとしており、それが私の関心をひいた。当時私は、ある本を手がけていた。それは『終わらない物語』というタイトルのエッセイで、その本のために七つのプロローグを書いておいた。初めは題辞として「タイトルの弁明」とつけていた。

秋の光が輝く午後だった。私は部屋でライニングチェアを窓際へ近づけた。するとヴァージニア・ウルフがこんなふうに私に話しかけた(英語の *you* はスペイン語の君 *tú*、あるいは君たち *vosotros*、とも聞こえる)。

ところで、とあなたたちは私におっしゃるでしょう。女性と小説について話すようにとお願ひしたのです。それが自分ひとりの部屋とどんな関係があるのですかと。そのことを説明しましょう。

あの説明以上に私を喜ばせたものはなかった。本を読み終えたとき、一一九番通りはすでに日暮れており、テンプルの明かりを点けなければならなかった。そうした時間は、高層ビルに囲まれた中で自分が外国人であることを思い出させる不安や、自分自身と向かい合うことから逃げながら、通りにとび出し、魅力を見つけようとやっきになって、ニューヨークタイムズで評された催し物の長いリストに目を通さざるを得なかった不安が消え去った。仮住まいの部屋の四つの壁が私の上に倒れてこなかっただけでなく、私を物質的に包みこんだ。あの日の午後くらい、一人の女性にとって自分だけの部屋を持ち、閉じこめられるのではなく解放としてそこに住むことの特権を理解したことはなかった。

ここではヴァージニア・ウルフのエッセイを批評しようというのではなく（いっぽう、後で知ったのだが、フェミニストたちにこのエッセイはよく知られており、引用され、広まっていた）、前述したように、彼女の解釈が、初めて私に、女性の言説に特殊性があるかもしれないという問いかけにこだわってみようとした。私が最も興味をひかれたのは、理論的なテーマを扱う際の彼女の語り方だった。全く学者ぶったところがないのである。観念的な神々が住むオリンポスの山から決定的な結論を投げかける以上のものだった。ヴァージニア・ウルフは、まさに知的な旅を駆け抜けるための具体的な道についての指示を、それぞれの状況において与えていった。私たちは異なったテーマを理解したが、特にどのようによい、どこで彼女がそれらについて考えを巡らしていったのかを知った。本を閉じたとき、似たようなテーマでも男性はけっしてあのような方法で向かわないだろうと直感した。だがその方法は何に基づいているのだろうか。あの直感を説明するのは私には難しいし、それを理論にするのはもっと困難だ。とはいえ、ヴァージニア・ウルフの本から抜き出した質問が、私のなかで形をつくり、空气中に浮かんだ。

二年後、スペインのテレビ局がテレサ・デ・ヘスースの生涯についていくつかあるエピソードのシナリオを作成するよう依頼してきた。そこで私は彼女の全作品をていねいに読むことを余儀なくされた（あのような刺激なしには決して取りかかろうとは思わなかった仕事だった）。女性作家に独特の書き方があるのかわからないかという問いを、再び私に考えさせることになった。アピラ出身の作家との個人的な会話のように、彼女の口ごもりながらも開かれた言説の調子に触発されて、ノートに書き留めていったコメントと、テレビのシリーズのための会話の作成を同時に行った。（私が引き出したメモは後に、「方法を探して」という講演のタイトルの材料になり、それは今私が書いているこのプロローグも含んでいる）。

ここ数年、インタビュアーや、博士論文の著者、私が参加した討論のアシスタントたちが私にする質問を通して、女性の記述についての論争は熱烈な関心呼び起こしたことがわかった。そこで時間のあるときに、それについて資料を集めていった。特にアメリカの大学のさまざまな教師たちからは定期的に呼ばれ続けた。彼女たちによれば不可欠だというフェミニズム批評の書物を何冊か、彼女たちは熱心に私に勧めた。だが私の手に入ったこうしたタイプの作品は、ほとんど英語圏の作家によるものだったので、かけはなれたユーモアや、ヴァージニア・ウルフが追放すると宣言した博士の男性による家父長的な方法の書き方で飽き飽きし、教条的な結果となった。

フェミニズム批評という言葉は、認められているほど私自身は納得していないが、用いられている作品の中では定義づけにむけての道が開かれようとしていた。ジュデイス・フェツタリーが著書『抵

(6) Feteneyv Judith (1938)、米国ニューヨーク生まれ。英語と女性学を専門とする。翻訳は鶴殿えりか、藤森かよこ訳『抵抗する読者：フェミニストが読むアメリカ文学』、ユニテ、一九九四年。

抗する読者 (*The resisting reader*)』のなかで明らかにしたのによれば、フェミニズム批評は、「成文化することへの抵抗と、あらかじめおかれていた要素を残しておくことへの拒否」によって特徴づけられるのだという。とはいえそれらの本の意図が、そうした要素を据え、定義するのは別のものとは思えない。おそらく男性によって書かれた批評の構想とは対照的なものになるだろうけれども。

例えばハロルド・ブルームは一九七三年に著した、『影響の不安、*The anxiety of influence*』<sup>7)</sup>で、男性の文学作品を説明する際にフロイト理論を援用している。彼によれば、先駆者とは反対の立場をとる作家の反応として、自己を規定していく過程として理解できるといふ。詩人はだれもが父親の作品(この場合、文学的という意味だが)を修正しながら、また自分の作品が成熟し、自由を勝ちとるために、父親の作品を排除しようとする<sup>8)</sup>と展開する。

こうした理論(議論の余地がある以上に)に意見を述べるならば、サンドラ・ギルバートとスーザン・グーパー<sup>9)</sup>は、一九七九年の有名な書『屋根裏の狂女 (*The madwoman in the attic*)』で、女性の文学的創造を説明するために、フロイト理論やおおよそフロイト主義のタイプに異議を唱えるべきだとみなした。こうした作家たちによれば、ブルームの本のタイトルともなつた「影響の不安」は、女性作家においては別の様式を獲得することなのであり、それは彼女たちが「作家であることの不安」と呼ぶものへと変わる。そ

(7) Bloom, Harold, *The Anxiety of Influence: A Theory of Poetry*, Oxford University Press, Inc. 1973, 1997. 邦訳は、小谷野教、アルヴァイ宮本なほ子訳『影響の不安 詩の理論のために』新曜社、二〇〇四年。

(8) Gilbert, Sandra (1936), *Gubar, Susan*, 文学に家父長制度がどのような影響を与えているかを、ジェイン・オステイン、ジョージ・エリオット、エミリー・ディケンズほか多数の作家の作品を通して検証しようとした。邦訳は山田晴子、園田美和子『屋根裏の狂女 フロントと共に』、朝日出版社、一九八六年。邦訳では、作家論としてエミリー・フロンテとシャーロット・フロンテに限定している。

れは作品に対して、その正当性に疑問を抱くことで、起源や系統を求めるある種のやっかいな不安である。つまり作家が経験した不安が、先駆者との闘いに刺激を与えている間は、自尊心をもってその闘いから力強く抜けるだろう。ルーツや権利の要求を求める女性の不安というものは、クリエーターであるという目的を弱めることになり、あるいはそれを台無しにしてしまうということになりがちだろう。

女性が、紆余曲折しながらも進んで行くために、そして文学というジャンルへむかって女性性を否定せずにつくりあげなければならなかった企てが、常にクリエーターとしての能力を失わせたかどうかは、私には確かではないが、むしろ能力を豊かにしたのではないだろうか。だがそのテーマについて、一般的かつ断定的な形で意見を述べることは危険に思われる。むしろそれぞれのテクストの解釈に示唆を与えるようなコメントに対しては、より慎重であろうと思っている。それでももちろん明らかなのは、女性のテクストは、その人の人生で独自の経験によって裏付けられた限られた視点についての、鍵となりうるということだ。

そのことはアドリエンヌ・リッチ<sup>10)</sup>が一九七九年の「改訂としての読書 (*Reading as a Revision*)」<sup>11)</sup>でこのように述べている。

フェミニズムの影響のあるラディカルな文学批評は、作品を理解するために、まずもって私たちがどのように生きてい

(9) Rich, Adrienne (1929)。米国の詩人。六〇年代から公民権運動、反戦運動、フェミニズム運動にかかわる。レズビアン・フェミニズム運動にかかわる。詩集としての第一作『世界の変化』(一九五二)以降、多数の著作があるが、『変革する意志』(一九七二)、『血。詩』(一九八六)は、女性の意識をとらえようとする試みであり、『女から生まれる』(一九七六)では母性を個人的体験と制度の両面からとらえる。翻訳は多数あるが、例として高橋芽香子訳『女から生まれる』、晶文社、一九九〇年。本論で紹介されている書は邦訳が出ていない。

か、どのように生きてきたのか、どのように私たちが自身について想像するのをしむけてきたのか、どのように私たちの言語が、足かせであると同時に解放として役に立ってきたのか考える傾向があるだろう。

エレイン・シヨーウオーター<sup>(10)</sup>は、一九八五年の最近の研究「荒野におけるフェミニズム批評 (*Feminist criticism in the wilderness*)」で、識別するのにふさわしい二つの要素を通して、フェミニズム批評が自分の態度を明確にした際に、とても興味深い条件をつけている。ひとつめの要素は読者としての女性であり、アクセスする文学テクストの解釈について、深い考察をするだろうということと、彼女の人生のビジョンに影響していくということだ。もうひとつの要素は、女性自身が作家であるという文学テクストにおいて、どのように人生のビジョンを造形するのかということだろう。ここに、展開とそうした文学作品の個人的あるいは集団的な発展に焦点を当てながら、本来の意味で女性の記述への研究が始まるのだろう。シヨーウオーターは、このように続けている。

支配的な記述から離れて、文学も全体的な批評も存在しえない。つまり男性に支配された社会によって確立された、経済的な圧力から独立した出版物はひとつも存在しないということだ。

こうした断言によれば、ものを書く女性は、一方ではそうした支

(10) Showalter, Elaine (1981). フェミニズム文学批評で影響を与えている。一九七七年に『女性自身の文学』で、一躍注目を浴びることとなった。邦訳としては青山誠子訳『新フェミニズム批評 女性・文学・理論』、岩波書店、一九九〇年、川本静子ほか訳『女性自身の文学 プロンテからレッシングまで』、みすず書房、一九九三年などがある。本論で紹介されているこの書の邦訳はない。

配的なグループによってつくられた文学的、社会的、政治的基準に對して闘わなければならない。他方、女性が属している、よりおとなしいグループの生活体験とも闘わなければならない。とはいえ彼女の議論は、両方のグループの文化的な遺産と、実際の現実を同時に抱えることになる。それはシヨーウオーターが「二重の声のデイスコース」という論の要因となっているもので、正しく理解しようとしたいならば、捨てることのできない議論。参照するのに役立つ男性的な前提の原因となっている。

私は個人的には、女性であることや、議論における私の知識や、男性によって作成された研究の多くで、私の信用が失われたと思つたことはなかった。しかし現在、私がプロローグを述べている講演で明らかにしようとしているように、特に歴史において別の時代には、自分自身の声を聞かせたいということに對して、熱心に家父長的な判断に影響を一致させたいという欲求が、女性の作家にとつて大きな混乱をもたらしただろうということはわかつている。

私たちは、とシヨーウオーターはいう。社会の周辺で感謝して生きることをやめることなく、理性的であることを私たちに要求する、男性的な伝統の教師と助言者の娘であり、同時に私たちは、新しいタイプの知識と決意を生み出す新しいフェミニズム運動の姉妹であり、そのことは、学術的な討論のグロテスクな仮面を脱ぎ捨てることを私たちに強いている、と。

明らかにここにはひとつの矛盾がほのめかされている。というのは引用された議論が含まれた記述の文体は、ある種学術的であることからほとんど逃れることができないからだ。私自身、この序文を書く際に、アカデミックな悪い癖から離れようとしている。

特に女性の言語について語るのならば、探求するために、民俗や神話を通して、初期のフェミニストたちの要求よりもさらに遡らな

ければならないだろう。これらの神話のいくつかは、謎めいていて秘密めいた特徴が女性の話し方にあるとする。ある文化においては、女性が私的なコミュニケーションの形を作っていたことは明らかかなように思われる。それは公的な生活のなかで、ささいなことでは押しつけられた沈黙に抵抗する必要から生まれてきた。例えば宗教的な法悦状態において、女性の演説は理解不能であり、言葉のつながりは悪い。そうしたことは、そのように表現する人たちについては魔術の疑いや秘教の知識に陥れさせられることになる。しかしそのことに入り込むならば、聖テレサがいうように「言葉から抜け出す」ことにおいてそうだとはいえるだろう。余談としてとどめるだけで、ここではこれ以上言わないけれども。

このあと示される何人かの古典作家と現代作家について考えることは、一九八六年十一月にファン・マーチ財団で「スペイン文学における女性の視点」という総括的なタイトルでの四つの講演会の対象となった。読者は、フェミニズム批評の理論との併存の可能性を判断することになるだろう。短かったが、ここで引き合いに出すのはタイムリーに思われた。

最初の講演は、ほかのところから考えが出てきた。理論的よりも詩的な直感から、内部空間に閉じこめられた女性にとつて、内部空間はファンタジーの導火線になるのかという意味について浮かんできたのである。こうした空間のなかで、窓は基本的な要素として、ほとんどシンボルとして表れた。この本を読んだ人は、それがなぜなのかわかるだろう。

『窓辺から』とタイトルをつけたのは、窓辺にたたずんできたすべての女性たちへのオマージュとしてつけた。ファン・マーチ財団でのあの講演がもっていた口伝えで自然でわかりやすい特徴をできるだけ保つために、ページ下部につけた引用で疲れさせることに抵抗した。

それらに付随して、未発表のテキストと、数日前に偶然見つけ

た「すべてについて」と題された、とても個人的な性格の私の古いノートのテキストを加えた。それは先だった考えを説明するのに役立つだろう。それは私がニューヨークでの別の滞在中に書いたもので、夢の解釈を扱っていた。そのなかでは母と私が、離れた窓を通して秘密の記号を使って連絡をとりあっていた。母は二年後に亡くなったが、それは彼女の夢を見ない珍しい夜だった。だがあのとき、夢に表れた石碑の印象があまりに強かったので、翌朝目覚めるとすぐ、理解したばかりのことすべてが逃げてしまわないように、すらすらと書けるように机の前に座った。コンマひとつも直さずに出てきたままのテキストをタイプライターに写した。それを読んでもらったばかりの友人からのコメントに励まされてここにも入れた。というのは私は彼の意見にとっても重きをおいていたからで、何よりもまず彼は私に言ったのだ。「そのことを、女性だけがそう書けただろうということをおぼわっている？」。私はなぜそう言うのか彼に尋ねなかったが、的を射ていると思え、彼の言うことがとても気に入った。なぜなら特に彼の声には少しの皮肉も、軽蔑した調子もなかったからだ。

一九八七年一月二八日、マドリード

この序文は、友人であるマリア・デル・カルメン・リデルのアドバイスと、方向づけに負うところが多い。彼女はハンティントンンの教員で、一九八六年に、「内戦後のスペイン女性作家」という論文を作成するなかで要約を前もって私に教えてくれた際に、提唱してくれたのだ。初版でそのことに言及しなかった怠慢をここに改めた。

一九八七年一〇月二一日